004　TICA

著作	著者	あらすじ・感想
水の柩 （図書館） ☆☆	道尾秀介	＜中学校二年生の逸夫は同級生の敦子に小学生のときに埋めたタイムカプセルの手紙を取り替えてほしいと頼まれる。少女には秘めた決意があった＞ 「２０世紀少年」のように過去が異世界にあるならいいけれど、ダムに沈んだ昔の風景が水の底に見えてしまうのは残酷。映像化されたらどんなに怖い風景かと思う。が、今回の道尾秀介の仕掛けは面白くない。途中途中に結果（現代）を書きながら行くので過去の話がどう現在につながっていくのか興味を持つが、その辺の仕掛けがちゃちい。 それにしても、いくさんの親も敦子の親も、逸夫の親もだらしない・・。子供から許される親ばかり。んー、これもまた現実か^^;
贖罪の 奏鳴曲 （図書館） ☆☆☆	中山七里	＜弁護士・御子柴は記者の死体を遺棄した。警察は御子柴に事情を聴くが、彼には死亡推定時刻は法廷にいたという「鉄壁のアリバイ」があった＞ 「水の柩」と似た作りでこちらは出だしが犯行のシーン。途中の回想で話が反転し、それまでの主人公の悪の印象が変わっていく。殺した相手を子供にした作者の狙いにはまり、主人公を許したいけれど許せないジレンマがある。でも最後で新たな罪への罰を「死」という結果にせず、想像の部分を残しておいてもらえてよかった。 参考文献に「少年Ａ矯正２５００日全記録」とあった。人を救うことを償いにするという更生のありようが参考になっているといいなと思う。でもやっぱり明らかな殺意を持って子供を殺害した人間がどう変わろうとやはり許せないけれど。
くちびるに 歌を （図書館） ☆☆☆☆☆	中田永一	＜拝啓、十五年後の私へ。中学合唱コンクールを目指す彼らの手紙には、誰にも話せない秘密が書かれていた―。切なくピュアな青春小説＞ 舞台が五島列島の中学校の合唱部という地味さ、題名のイカサナさ、「ピュア」といいきる売り言葉―。全てが思い切って昭和な話を中田永一が書いた。この人が書いた３冊の中で一番面白かった。飄々としているサトル一人に焦点が当たっていたら今までと似たような感じになるところを、合唱コンクールが話を熱いものにした。自閉症のお兄さんのドロップの話、そのお兄さんの前でみんなが歌う場面に涙腺が刺激された。

		出版社と問題があって乙一が中田永一名義で書いたといわれているが、この話を読むと今までと違う路線を書きたかったのかなって気もする。白乙一とも違う昭和な乙一、とてもよいです。
彼岸花 （図書館） ☆☆★	宇江佐真理	＜短編集。嫁ぎ先でいじめ抜かれた妹に手を差しのべられなかった姉の後悔を描く表題作など全六編＞ 久々に新鮮な宇江佐真理を読んだ。銀次や伊三次のシリーズはもう作者も飽きているのだからやめて、こういう活きのいい江戸話を書いてほしい。
おまえさん ―上下巻 （健さん） ☆☆★	宮部みゆき	＜痒み止めの新薬を売り出していた瓶屋の主人、新兵衛が斬り殺された。本所深川の同心・平四郎は、同心の信之輔と調べに乗り出す。『ぼんくら』『日暮らし』に続くシリーズ第３作＞ 上巻だけでも十分厚い！長い！連載は４年にわたっていて、リアルタイムで読んでいた人はすごい。下巻の頭で犯人はすぐに確定したので残りはどうつなぐのかとそちらに興味があった。
名前探しの 放課後 上巻 （図書館） ☆☆	辻村　深月	＜タイムスリップで三ヵ月先から戻された依田いつかは、これから起こる“誰か”の自殺を止めるため、同級生と“放課後の名前探し”をはじめる―＞ 窮乏生活なので、上下巻というのに図書館で予約した。上巻は退屈。でもこの長さは下巻のためのものだと信じて下巻の順番が来るのを待ちます。内容を忘れそうだけど…。
傍聞き （健さん） ☆★	長岡　弘樹	＜娘の不可解な行動に悩む女性刑事が、我が子の意図に心動かされる「傍聞き」を含む４編＞ この本が健ちゃんによってうちに来る前日に友達とこの本の話をしていた。正確には本の話じゃなく「傍（かたえ）聞き」という言葉の話をしていたのだけれど。 Ａさんが「Ｃさんのことを Ｂさんがほめてたよ」とＣさんにいうより、ＡさんとＢさんが「Ｃさんがすごい」と話しているのをたまたまＣさんが聞いた方が真実味があるという意味。 それを短編にした「傍聞き」。母子が喧嘩したときに娘が母に手紙をだすという家族の約束が不自然な感じがする。わざわざ投函しなくてもテーブルにでも手紙を置いておけばすむこと。その方が母子の解決も早い。でもそれじゃ「傍聞き」という状況が作れない。せっかくいい言葉を見つけたんだからもうひとひねりほしかった。

古手屋喜十為事覚え（図書館）☆★	宇江佐真理	＜浅草のはずれで古着屋を営む喜十が北町奉行同心を助太刀する破目に。下町の変事を追ううちに、なぜだか人の温もりが沁みてくる。ほろりと泣かせる待望の新シリーズ＞ 「聞き屋与平」はカウンセラーの話で、今度は古着屋の話。江戸の商売を紹介してくれるのは楽しい。でもこの話は登場人物がよくない。活きがいい人も粋な人も主役クラスには出てこない。主人公の商売人としてのおべんちゃら言葉と裏腹な心とか、懇意にしている同心の図々しさとか。田舎の人は素朴、みたいな勝手な幻想であっても江戸の町の人には情があってほしい。…古地図巡りしたいなぁ。
ルーズヴェルトゲーム（健さん）☆☆☆★	池井戸　潤	＜中堅メーカー青島製作所の野球部はかつては名門と呼ばれたが、今は成績低迷中。野球部の存続をめぐって、社長や幹部たちが苦悩するなか、ライバル企業が合併を提案してくる＞ フランクリン・ルーズヴェルトが「野球は８対７が面白い」と言ったことで ８対７の試合をルーズヴェルト・ゲームと呼ぶらしい。うまくいきそうになると障害がでてまたそれを乗り越えて・・と「下町ロケット」と同じ流れだけど、飽きることなく読める。視点を変えるとこんなにも読みやすくなるという新しい企業小説の形を作ったのではないでしょか。
銀色の絆（図書館）☆	雫井脩介	＜夫の浮気で離婚、娘と転居し、無気力な日々を送っていた藤里梨津子だったが、フィギュアスケートの名コーチに娘の才能を見出され、娘を支えることに生きがいを感じ始める。スケートクラブ内の異様な慣習、途絶えた養育費、コーチとの軋轢―人生のすべてを懸ける梨津子の思いに娘も応え成績を上げていく＞普通、こういう↑宣伝文句で読みたくなるのに、このつまらなさはなんだろう…。 「火の粉」「犯人に告ぐ」は面白かった。以来「クローズドノート」「犯罪小説家」など駄作が続く。この本もスケートでつながれている特殊な母子関係に共感できないし、「若さを失う代わりに上質な生活を手に入れることがごくごく自然な人生の流れ」だと思っていて、それが一生続くと思っていたような女は好きじゃない。タイプが似ている人や、スケートをやっている人は面白く読めるのかな。元日のことを元旦って書いてある時点で、私の中ではもうこの人はだめだなー。
チルドレン（病院図書）	伊坂幸太郎	＜短編集のふりをした長編小説です。帯のどこかに“短編集”とあっても信じないでください。伊坂幸太郎＞

☆☆☆☆		面白かった。チャイルドが複数になるとチルドレンって別のものになるって。なーるほど。身につまされる内容もあったけれど、全体に流れる軽さが温かくて好き。
うつな気分がだんだん晴れる本（病院図書）	斉藤茂太	病院の図書室にあった本。ながーーーい待ち時間にぱらぱら読み。生まれてから一度も病気にかかったことがないような人間を友人にするなとトルストイの言葉が引用されていて、心の痛みを知らないものは人への思いやりにかけると書かれていた。それ以上に厄介なことは、痛みを知らない人間が自分の物差しで想像して痛みをわかった気になったり意見を言ったりすること。人の立場に立つという意味の曲解。
漫画で読破ツァトゥストラはかく語りき（病院図書）		病院の図書室本。難解なものは難解。絵も下手で笑わせどころとしているのも下手。わかんないのが余計にわからなくなる。ニーチェ入門編としても不向き。
六つの手掛かり（健さん）★	乾くるみ	＜探偵役と一緒に、鮮やかな謎解きを追えるミステリー六編＞連作。題名の「一巻の終わり」と「二枚舌」はかかっているけれど、「三通の手紙」以降はただの数字の題名。続かないなら最初からやめた方がいい。チャップリンにかけた主人公のマジシャンを林茶父（はやしさぶ）と名付けたのも、外見をまねしてキャラを作ろうとしてるだけ。ネタも、三人に宛てた手紙をみんな間違えて出すなんてまるで不自然。主人公自体、人間ぽさがなく作り物感が強いのでなんでもありなのか。やっぱりこの人は何冊読んでも好きじゃない。
ツナグ（図書館）☆☆☆★	辻村深月	＜一生に一度だけ、死者との再会を叶えてくれるという「使者」。ツナグの仲介のもと再会した生者と死者。それぞれの想いをかかえた一夜の邂逅は、何をもたらすのだろうか。心の隅々に染み入る感動の連作長編小説＞ 読んでからこの話も今年の１０月に映画になると知った。「本日は大安なり」（未読）がＮＨＫで連続ドラマでやっていたと思ったら今度は長澤まさみで連続ドラマ「ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。」を撮っていた。これは話を大幅に変えたことが原因で辻村深月が納得せず中止になったんだけど、あんな面白い話を変えるんじゃ意味ないもんね、中止で結構←湯川学風に 「ツナグ」を読んでしばらくしてから直木賞候補に名前が挙がった。名前に「直木賞作家」とつく前に、もうちょっと新人の

		位置で好き勝手な話を書いてほしいので、まだ獲ってほしくないけれど獲っちゃうだろうな。もうちょっと売れていない方が好感持てる…っていうにはすでに十分売れすぎてるか。
ナミヤ雑貨店の奇蹟 （健さん） ☆☆★	東野圭吾	＜あらゆる悩みの相談に乗る、不思議な雑貨店。しかしその正体は…。物語が完結するとき、人知を超えた真実が明らかになる。すべての人に捧げる心ふるわす物語＞ つまらないわけじゃないんだけど、この手のファンタジーは他の人に任せて、東野圭吾には「容疑者Ｘ」みたいな話を書いてもらいたい。大御所と呼ばれる６０近いおっさんのファンタジーはあざとくていけない。
アヒルと鴨のコインロッカー （病院図書） ×	伊坂幸太郎	＜「一緒に本屋を襲わないか」大学入学のため引越してきた途端、悪魔めいた美青年から書店強盗を持ち掛けられた僕。標的は、たった一冊の広辞苑――四散した断片が描き出す物語の全体像とは？＞ちょっと読んだら「ペット殺し」って言葉が出てきちゃったので恐怖に震え、停止。読書サイトの人たちに聞いたらまだこれからも出てくるというので、中止。これによって、わたしは伊坂幸太郎は一生かけても読破できないこととなった。
ジーン・ワルツ （病院図書） ☆	海堂　尊	＜32 歳の美貌の産婦人科医、曾根崎理恵―人呼んで冷徹な魔女（クール・ウィッチ）。顕微鏡下人工授精のエキスパートである彼女のもとに、事情を抱えた五人の妊婦がおとずれる＞ これまでは専門用語が多く難解な話ながらも、登場人物に特徴を持たせ心情を書いていたのでなんとか楽しむこともできたけれど、この本の主人公は行動と会話だけ。読む人にヤサシクナイネー。
酒田さ行ぐさげ （図書館） ☆	宇江佐真理	＜日本橋の廻船問屋の番頭・栄助の前に現れたのは、以前同じ店で働いていた愚図でのろまの権助だった。権助が庄内酒田の出店の主に昇格したと聞いて驚きと同時に嫉妬の情が湧きあがり…。日本橋に生きる人びとの悲喜交々を描く傑作短篇集＞
殺人鬼フジコの衝動 （bookoff） ☆☆	真梨幸子	＜一家惨殺事件の生き残りの十歳の少女。彼女は人を殺し続ける。何が少女を伝説の殺人鬼・フジコにしてしまったのか？あとがきに至るまで、精緻に組み立てられた謎。最後の一行を読んだとき、あなたは著者が仕掛けたたくらみに戦慄する！＞ 長年、ぐーーーっと押さえつけられてたもののタガが一度はずれたら、あとは簡単なのかも。なんて、少しでも理解しようと

		思うのは無駄。警察の捜査や殺人方法などは省き、殺人が調子よく進み、フジコの山坂の人生がコミカルに思えるほどに、現実味のなさを出し切った作り話に徹している。 そのせいか、湊かなえの「告白」以外の本の後味の悪さのほうが苦手。
夜鳴き めし屋 （図書館） ☆☆☆	宇江佐真理	＜「ひょうたん」の続編。古道具屋鳳来堂の十数年後を描く。美味い酒と肴、そして親譲りの心意気に惹かれてまた一人、今宵も暖簾をくぐる―＞
オー！ ファーザー （図書館） ☆	伊坂幸太郎	＜母一人子一人、父四人の家族が変な事件に巻き込まれて―＞ 著者あとがきに「スリーメン&ベイビー」の話があった。そういえば大好きな映画だったな…。 この本の主人公には４人のお父さんがいるので映画をうわまわる。登場人物は、父親４人とそのうちの誰かの高校生の息子、それと息子を追い回す鬱陶しい女子高生。母親は出張で家を空けている設定。 母親が亡くなってしまい、妊娠を告げられた当時は逃げた男たちが集まって息子を育てる…というなら話としてはわかるが、さすがにおおっぴらに登場はしないお母さん、同時期に４人の男と付き合っていた、ただの性にだらしのないお人。これは遊びまくった女性のためのお伽話。息子の由紀夫くんの頭のよさが窺える会話が救い。
時間の おとしもの （図書館） ☆	入間人間	＜少女が台所で偶然見つけた携帯電話。耳を傾けた向こう側には、もう一人の自分がいて…＞ なんでこの本を読みたかったか忘れてしまった。図書館に予約したのはなんでだったんだろう。予約本はすぐに来ないのでそんなことも忘れてしまう。読みたいと思った時が読み時なのはもちろんだけど、今はそんな贅沢は望めない(p_q)ｴｰﾝ 一冊目が合わないだけかもしれないが、この話は苦手な方の若さ。１％くらいラーメンズのニオイもしたし、乙一的なものも少し見えたんだけど…。著者あとがきに「失われた物語」が好きだと書いてあった。やっぱり乙一だったか。でもこの作者は時間を止める側にいる。時間は止まっているのかもしれないって発想を持たない人間なんだろう。若いころの乙一は、止められる側にいたと思う。主役じゃない側に。動きを止めた自分の横を、時間を止めることができる人がすまして歩いて行っているのかもしれない。自分の時間は１秒も過ぎていなくても、も

		しかしたら誰かが時をとめて何年も経ってるのかもしれないー。そんな主役じゃない自分を思う人って少ないんだろうか。
パラダイスロスト （健さま） ☆☆☆☆☆	柳　広司	＜大日本帝国陸軍内に極秘裏に設立された、スパイ養成学校“Ｄ機関”。「死ぬな。殺すな。とらわれるな」―軍隊組織を真っ向から否定する戒律を持つこの機関をたった一人で作り上げた結城中佐の正体を暴こうとする男が現れた。全５篇＞ ジョーカーゲームシリーズ第三弾。かっこいい！！の一言。第二弾の「ダブルジョーカー」より好き。って二言。
銀行総務特命 （健さん） ☆★	池井戸潤	＜巨大銀行で次々と起こる不祥事・スキャンダル処理の特命担当調査役・指宿修平。特殊な「捜査権」を与えられた男の孤独な闘いを描いた銀行ミステリーの傑作＞ 最初の話は読むのに時間がかかった。でも連作だったので挫折することはなかった。一編ずつが淡白で、結果が出ると「その後」とか余韻のないまま、ジョキンと切れたように終わる。銀行が舞台だけに・・と思ってしまった。 描写と心理の書き方が分けられていなくて、理解力の乏しい人間にはわかりにくかった。≪前原の疲労を滲ませた顔を眺めた。えくぼのある可愛い印象の女性だ。人事資料によれば独身ということだったが、知的な印象の美樹に恋人の一人や二人いたとしてもおかしくはない≫こんな短い文章の中で出てくる「前原」と「美樹」は同じ人だからね。
舟を編む （健さま） ☆☆☆☆☆	三浦しをん	＜玄武書房に勤める馬締光也は営業部では変人として持て余されていたが、新しい辞書『大渡海』編纂メンバーとして辞書編集部に迎えられる。言葉という絆を得て、彼らの人生が優しく編み上げられていく。言葉への敬意、不完全な人間たちへの愛おしさを謳いあげる＞ 図書館の予約人数が１０００に近かったので、健ちゃんに買うようにニコニコしてお奨めしたら、この人は嫌いだから買わないって。伊坂幸太郎も宇江佐真理も一冊で懲りて読まないんだって。一冊目に「魔王」と「おぅねすてぃ」を選んだのがいけない。どちらもつまんなさすぎだもの。だけど、次に逢ったとき健ちゃんは「舟を編む」を持っていた。「辞書の話じゃないかぁ」って(^.^)　なんでも一応言っておくもんです。 題名も素敵なこの話は期待以上。なにごともネットで調べてしまう時代に辞書の話で面白く読ませるっていうのが先ずすごい。前半のテンポの良さは、語り手が代わってもそのまま。西

		岡のキャラが立ちすぎてあれほど特徴的な主人公をも食べてしまいそうなくらい。そのかっこよすぎは減点ポイントかな。松本先生の人生だけでまた別の話が書けそう。地味ぃ～なスピンオフになるだろうけれど読んでみたい。この先生の話でそれまで笑って読んでいたのが泣くはめになる。 読み終えたので映画化のキャストを自分の中で解禁。案の定といった感のある宮崎あおいと、前の「まほろ駅前～」の映画と同じ、松田龍平。あわないと思っても映像化されたらぴったりとか思っちゃうのかなぁ。他はまだ決まっていないなら、せめて西岡はわたしも考えてみよう。 本の装丁の漫画家さんがＢＬ系で娘が前から好きだった雲田はるこさん。あまり好きな絵じゃなかったけど、この人の落語の話でも読んでみよっかな。 ところで、この本が本屋大賞をとったときの第２位は「ジェノサイト」で、第４位が中田永一の「くちびるに歌を」だった！！あんな昭和な話がこんなに支持されてるなんて知らなかったぁ！知らなかったといえばもうひとつ。「しをん」は本名だって。改めて見ると辞書に載っていそうな名前だ。
水底 フェスタ （図書館） ★	辻村深月	＜村も母親も捨てて東京でモデルとなった由貴美に魅了された広海は村を売る協力をするが、由貴美が本当に欲しいものは別にあった―。辻村深月が描く一生に一度の恋＞ 最初から読みにくかったのは「舟を編む」の次に読んだせいかと思ってみたが、なんてこたない、つまらないからだった。この人じゃなかったらすぐに放棄してた。父と自分の血液型がわかっていて親子関係はありえないんだから、疑いを残したようなもったいぶった終わり方に意味はあったのか疑問。同じく、沈む村を背景にしている道尾秀介の「水の柩」のほうが綺麗な怖さがあった。
光待つ 場所へ （図書館） ☆	辻村深月	＜悔しい、恥ずかしい、息苦しい――。それでも日々は、続いていく。 心震わす傑作青春小説＞ 中田永一の「くちびるに歌を」は、自分にはないまっすぐな中学生の話だから読者になりきれて純粋に感動もできるが、この本は若いときに読んでいたらもっと共感していたかもって近さがあった。でも今が若くないときだから、独りよがりっぽさを感じただけで面白くは読めなかった。 読みおえてからいろいろな小説とリンクしているってわかっ

		た。伊坂幸太郎もよくやるこういうお遊びは好みなんだけど、いかんせん楽しむには読んでいる数も力も足りない。わたしには「凍りのくじら」の人っていうくらいしかわからなかった。この本を読んでいるときに辻村深月の直木賞受賞が決まった。これからは余計に図書館で借りにくくなっちゃうな。受賞作は一気に予約数が３倍になったしね。
廃墟に 乞う （図書館） ☆☆☆	佐々木譲	＜道警の敏腕刑事だった仙道孝司は、ある事件をきっかけに療養中の身。回復してきた仙道に、厄介な相談事が舞い込む＞ 直木賞受賞作というので長編だと思っていたら短編の連作集でした。ぶった切り感があってさっぱりしすぎだけれど、読後感は悪くなかった。題名もいいし。でも直木賞を獲るまでかと言われたら「舟を編む」と比べると、…ね。 物語とは関係ないが解説が間違えている。被害者の息子だった容疑者を「腹違いの弟」と書いてある。え？そうなの？と思って読み直したけれど、やっぱり弟じゃない。そのうえ、勝手に主人公に二回も失恋させている。わたしには解説がいう二回とも恋心とは思えなかった。あんなのを恋心と言われたら一気に主人公が安っぽくなる。解説が間違えてるなんてありえないと思ったあなた、是非読んでください。もし読みの浅いわたしが間違えているときは言ってください。すぐ謝ります。
遺稿 （図書館） ☆☆☆☆	立川談志 絵 山藤章二	＜立川談志、2011 年 11 月 21 日喉頭癌にて死去。享年 75。戒名は「立川雲黒斎家元勝手居士」。世の中を挑発し、常識に異を唱え続けてきた家元が、最期の最期に選んだのは「書き続ける」ことだった―＞「俺はもう駄目、本当だ…」って最後の一文が淋しいよ。志ん朝は亡くなって長い時間が経つからいないことにも慣れているけれど、談志は存在がまだ生々しい。「これはまたあとで」みたいに書いてあることが多くて、話せなくなってもたくさん伝えたいことがあったんだろうに。切ないね。そういえば自分でつけた戒名のせいで入るお墓がないって話はどうなったんだろう。それもまた談志らしいけれど、名前自体はひねりが足りなくて「しんちゃん」かよ、ってつっこみたくなる。最後の洒落は効きが悪かったね、談志さん。 山藤章二の絵と話はとてもいい。
マリア ビートル （図書館）	伊坂幸太郎	＜元殺し屋の「木村」は、幼い息子に重傷を負わせた相手に復讐するため、東北新幹線に乗り込む。狡猾な中学生や三人の殺し屋もまたそれぞれの思惑のもとに同じ新幹線に乗り込む＞

☆★		話が見えるまでが辛かったぁ。全体的には、どたばた殺人群像劇といったところ。まさか強力キャラたちまで殺されるとは…。人が簡単に殺されすぎ。途中動物虐待も出て来てカンベンだぁよ。これは映画化はないでしょね。 表紙に、あまり巧くない絵で登場人物が描かれているが、イメージを押し付けられているようで邪魔。「舟を編む」もそうだったけど、今流行ってるのかな？やめてほしい。
ビヴリア古書堂の事件手帖３ 栞子さんと消えない絆 （健さん） ☆☆☆	三上　延	＜鎌倉の古本屋「ビブリア古書堂」。これは“古書と秘密”の物語＞眼鏡をはずすとすごい美人とか、醜いあひるの子的な話が日本人は好きなんだと思う。この素敵な名前の古書堂店主も普段はおどおどしているのに、本のことになると素晴らしい推理と行動力で解決していく。 今回は、西谷祥子の「いとこ同盟」なんて懐かしい漫画の名前が出てきた。そのころは貸本屋が近所にあったり、誰かが買った一冊の漫画を回し読みはすることは当たり前だった。漫画一冊を大事にゆっくり読んでいた時代だったと思う。 今は猛暑の中でも、徒歩１５分の図書館にまめに通っているが、昔は近所の貸本屋に本を返しに行くのがあんなにいやだったのはなぜだろう。
髪結い伊三次捕物余話 ～心に吹く風 （図書館） ☆☆☆★	宇江佐真理	＜一人息子の伊与太が修業先をとびだし家に戻ってきた。心配する伊三次をよそに、奉行所で人相書きを始めるが…＞ いっとき、龍之進の成長物語になり伊三次から物語が離れた。同じ頃にＵＦＯの話が出てきたときは、「江戸にＵＦＯ」のネタとしては面白いが、伊三次の中で出すのは違和感があった。著者もこのシリーズを終わらせたがっていると読んだこともあり、「伊三次」の傷口を広げないうちに完結してほしいと思っていた。が、今回は伊三次が帰ってきた。子供だった登場人物も大人になりそれぞれの生活ができてきて、その分幅が広くなった。ただ、もうこれ以上伊三次をホームドラマっぽいところに置いておいてほしくない。去年の７月にこの１０巻が出たのにもう新巻が出ている。こんなに間があかないのは初めてのこと。いよいよ、最終章？ 今回主役クラスの女性を書きすぎていて鼻につきはじめているので、新作はその辺をさらりと行ってほしい。
ある少女にまつわる	佐藤青南	＜ある少女をめぐる忌まわしい事件。10 年前にいったい何が起きたのか。様々な証言が当時の状況を明らかにしていく。『告

殺人の告白 （図書館） ☆		白』形式の語りに、大きな謎が加えられたミステリー。2011 年『このミス』大賞優秀賞受賞作＞インタビュー形式は「理由」や「告白」の印象がまだ残っているので比べてしまう分見劣りする。＜悲しくも恐ろしいラスト＞と力を入れているのは話には直接関係のないところだから、ふぅん…って感じ。
夜行観覧車 （図書館） ★	湊かなえ	＜父親が被害者で母親が加害者。高級住宅地に住むエリート一家で起きたセンセーショナルな事件。遺されたこどもたちは、どのように生きていくのか。その家族と向かいに住む家族の視点から、事件の動機と真相が明らかになる＞相性が合わないのか、やっぱりだめ。この人に「告白」越えは諦めました。
名前探しの 放課後 下巻 （図書館） ★	辻村深月	いくら予約数が同じくらいだからと言って上下巻を図書館で予約してはいけないと当たり前の事が身に染みてわかった。間が開きすぎたせいか下巻が読みにくかった。それでも頑張って読んだ挙句の仕掛けが現実的じゃなさすぎ。その仕掛けによってやったことは「あれだけ」。あれだけのことが大事、あれだけだからこそっていうのはわかるけどそれにしたって長い上下巻を読んで、とんでもない仕掛けの理由があれだけって、おい。それからもっと気に入らないのは、終わり間際の二か所の思わせぶり。「まさかかかってしまうとは」って唐突な台詞やそれまでは苗字だけ出ていた女の子が意味ありげにフルネームで出てきたところ。あと何ページもないところでどうオチがつくのかと思ったらオチどころかそこには二度と触れないまま終わった。あとでこれも別の小説と登場人物がリンクしていて読んでいる人にはわかるということだった。本同士のリンクの面白さは納得しても、この本の中では解決できない事を大事そうにもったいぶって注目させるのはあまり趣味がよろしくない。先に「ぼくのメジャースプーン」を読んでねって書いてくれなくちゃ。っていうか、読んだのにわからなかった人だってここにいる。違う本に書いてあった能力の話や名前なんていちいち覚えてないって。自分の本を読む人はこのつながりがわかっているという前提に立って書くのは傲慢。直木賞を獲ってこれからもっといろいろな人が読むだろうから、このスタンスで書きとおすのは自己満足といわれても仕方ない。
我が家の 問題 ☆	奥田英朗	＜平成の家族小説シリーズ第２弾。完璧すぎる妻のおかげで帰宅拒否症になった夫。両親が離婚するらしいと気づいてしまった娘。誰の家にもきっとある、ささやかだけれど悩ましい６つのドラマ

（Ｋ氏蔵書）		＞家族の問題に奮闘するが結果はない。のほほんと生活している人が読むと他愛のなさにほのぼのしたりクスクスしたりするのかな。誰の家にだってあることって決めつけはＯＵＴっ！
夢違 ★ （Ｙ氏蔵書）	恩田　陸	＜夢を映像として記録しデジタル化した「夢札」。夢を解析する「夢判断」を職業とする浩章は、亡くなったはずの女の影に悩まされていた。そんな折、浩章のもとに奇妙な依頼が舞い込む＞ 面白いと思わないと雑に読んでしまう。それでいてこれから面白くなるかもしれないと途中で止めることは滅多にしない。ちゃんと読まないことがもったいないのか読んでいる時間がもったいないのか…。この本は後者。
検事の本懐 （図書館） ☆☆☆☆	柚月裕子	＜検事・佐方貞人の姿を描く『このミス』大賞作家による傑作検察連作集＞初めての作家さん。予備知識もないまま読み始めたが、読んでいる途中で図書館にこの著者の「最後の証人」も予約したほど最初から面白かった。服装や仕草はまるで違うけれど、佐方検事の禁欲的なキャラクターは杉下右京を彷彿とさせ、そのせいか「罪を押す」の言葉使いに違和感があった。そのときの取り調べだけは伊丹刑事みたいだなぁって…。「相棒」から離れないわたしでした^^;辻村深月の次はこの人にはまろうかな。
ハード ラック （図書館） ☆★	薬丸　岳	＜ネットカフェ難民相沢仁は、闇の提示板で募った仲間と軽井沢の金持ちの屋敷に押し入った。だが物色中、仁は何者かに頭を殴られて昏倒。ようやく独り逃げた彼は報道で、屋敷が全焼し、三人の他殺体が発見されたと知る＞
同期 （図書館） ☆☆★	今野　敏	＜暴力団員から発砲された警視庁捜査一課の宇田川を間一髪で救ったのは、同期の公安刑事蘇我だった。直後、蘇我は懲戒免職になり姿を消す＞新米刑事の成長物語・・というほど挫折はない。それどころか、普通は逢うこともできない裏の人間にすぐに逢って気に入ってもらえたり、何事もうまく行きすぎ。ドラマ化されていて、主役がこれも松田龍平。げっそり感否めず。他のキャストを見たら蘇我に妹がいた。身内がいないことも公安に引っ張られた一因と書いてあったのに。テレビってこういうとこだめね。

健ちゃんと同じ本を読んでも、感想がまるで違う。健ちゃんはどんなにつまらない本でもいいところをひとつでも見つけて延ばしてあげようと思っている親心がある。
顔を合わせて話をする人間相手にはその良さは見うけられないのがひじょーーに残念だけど、本好きの読者としてはお手本にしたい満点の姿勢だと思います(^^)